

曲 目 解 説

メンデルスゾーン(1809～47)作曲の劇音楽『真夏の夜の夢』は、プロシア王F.ヴィルヘルム4世の命により1843年に作曲され、同年10月14日ポツダム宮殿で初演された。ご存じの文豪シェイクスピアが1595年頃書いた全五幕の同名の喜劇にメンデルスゾーンが曲をつけたものである。「真夏」というのは盛夏のことではなく、夏至のことで6月24日の聖ヨハネ祭頃に怪奇事件が起るといふ伝説から発想されている。あらずじは、アゼンスという地方を舞台に、領主のシーシアス侯の結婚を中心に展開され、アゼンスの森の妖精達を巻き込んで媚薬「浮気草」めぐって生じる恋愛コメディである。生前から人気作曲家であったメンデルスゾーンの現在でも最もよく知られたメロディ一群である。

J. S. バッハ(1685～1750)作曲のブランデンブルク協奏曲全六曲は、1721年3月24日付でブランデンブルク辺境伯クリスチャン・ルードヴィヒに献呈されたものであり、近年の研究によれば、第三番は1718年頃の作曲であるらしい。本来はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロとコンティヌオ(通奏低音)を担当するチェンバロの編成で演奏されるが、コンティヌオのパートはコントラバスで代用される。実際にチェンバロが担当しなければならないのは第五番で他の協奏曲では代用が可能である。全体は二楽章の構成で緩徐楽章が抜けているようだが、第一楽章の最後にアダージョ部分がフリギアン旋法で一小節設けられている。一説によるとこのハーモニーに乗せてカデンツを演奏したのではないかといわれるが明らかではない。ただ異様な感じのするアダージョではある。

ベートーヴェン作曲のピアノ協奏曲第五番『皇帝』は、1809年に作曲され彼のルドルフ大公に献呈された。初演は、1811年11月28日ライプツィヒのゲヴァントハウスでおこなわれた。1809年というと再度ナポレオン軍がヴィーンを包囲、占領した年であり堪え難いような戦乱中の作曲ということになる。事実、老衰し病臥していたハイドンは大砲撃のため神経を痛めて亡くなっている。同時にこの大砲撃は聾者ベートーヴェンにとっては、程よい刺激剤くらいにしかならなかったようだ。『皇帝』がこれを証明している。

『皇帝』作曲時のベートーヴェンは、研究者の間で「リズムの支柱」とまで言われる中期のリズム偏重の時期から、後期のフーガや変奏曲中心の時期への過渡期に在って、平易な・日常的な・安らかなものを求めていた頃である。大規模な構成や力性の追求を放棄しつつ、力の内面化や旋律性を模索し始めた頃である。そうした時期にあって『皇帝』は一種特異な性格を持っているといえるだろう。このことは、第一楽章の結尾部のカデンツァにも見られる。「カデンツァ無用、そのまま続けるように」と指示されていて、この協奏曲を契機として、技巧美を追求していた態度を改めることになる。

『皇帝』という名の所以は不詳である。

(藤井部 勉)